

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320016

研究課題名(和文) 現代日本の葬送墓制をめぐる&lt;個&gt;と&lt;群&gt;の相克 - 東日本大震災を見据えて -

研究課題名(英文) Conflict between individual and groups on the System of Funeral and Grave in Contemporary Japan

研究代表者

鈴木 岩弓 (SUZUKI, Iwayumi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：50154521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：近年の日本の葬送墓制は、変動の中で大きく揺れ動いている。一方では都市化の進行で<個>の重視に拍車がかかっているのに対し、他方で血縁・地縁・社縁といった伝統的な絆による<群>の論理も併行して存続しており、<個>と<群>の微妙な力学の中に現代人の葬送墓制がおかれているからである。本研究ではわが国葬送墓制の先端的動向に、東日本大震災の影響のもとに顕現してきた視座を加味することで、現代日本における生者と死者の関わりの動態メカニズムをディシプリン横断的に解明する。

研究成果の概要(英文)： The system of funeral ceremony and cremation changes greatly in contemporary Japan, recently. In the rear, there is a fight of sense of values between the individual-centered modern society and the group-centered traditional social sense of values. In this research, we find out the mechanism of the relations between the dead and the living from the standpoint of interdisciplinary method.

研究分野：宗教学

キーワード：葬送 墓制 死 死者 イエ 現代日本 東日本大震災 死生観

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 21 年度から研究を開始して推進してきた、基盤研究(B)「わが国葬送墓制の現代的変化に関する実証的研究-〈個〉と〈群〉の相克-」の発展的延長線上に位置する。平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が勃発したことにより、通常のが国の日常社会では表に出てこなかった現代日本における遺体観・霊魂観・世界観などに関わる葬送墓制の問題が顕在化してきた。そこでこれまでの科研を一年早めて終了し、東日本大震災をめぐって明らかになった葬送墓制の特質に対する視覚も加味する研究計画を立案し、「様式 U-2」を提出したところ採用され、本科研を平成 24 年度からスタートした。

## 2. 研究の目的

近年の日本の葬送墓制は、変動のただ中で大きく揺れ動いている。一方では都市化の進行に伴い個人化・無形化・忘却化など都市における死者の〈個〉レベルの論理が全国的に進行しているのに対し、他方で血縁・地縁・社縁といった伝統社会の絆に立つ〈群〉の論理も併行して存続しており、〈個〉と〈群〉の微妙な力学の中に現代人の葬送墓制がおかれているからである。本研究ではこうしたわが国葬送墓制の先端的動向に、東日本大震災と言った非日常の中に顕現してきた視座を加味することで、ディシプリン横断的にその成果を深め、現代日本にみる生者と死者の関わりの動態メカニズムを解き明かす。

## 3. 研究の方法

(1) 研究チームを「葬送」班と「墓制」班に二分し、それぞれの班内で〈歴史〉〈社会〉〈意識〉のいずれかの分野を分担するよう構成した。特に東日本大震災に関わる情報については、代表者が事務局長を務める「心の相談室」との連携を図ることで、プライバシーに配慮した綿密な情報を研究に活かすこととした。

(2) 本研究では「大都市圏の公営墓地にある墓石の悉皆調査」と「葬送墓制に関わる全国規模の意識調査」の二つの共同研究を実施した。またそれらと補完する目的で年度ごとに設定した個人研究の発表機会として、年数回研究会を開催し、意見交換を行うことで、現代日本の葬送墓制に対する統合的な理解を目指した。

## 4. 研究成果

(1) 初年度には新旧の基盤(B)受け渡しともなる二回の国際シンポジウムを開催した。

国立歴史民俗博物館との共催として実施した国際シンポジウムは、平成13年度まで行っていた基盤(B)で予定していた企画で、予定通り7月に大正大学で開催した。この企画では中国・台湾・韓国の東アジア諸国の葬送墓制の比較材料が提示され、盛んな議論がな

された。またそれと同時に、新たな本基盤研究(B)のプロジェクトで目指すべき問題点の洗い出しがなされる結果となった。このときの成果は、平成26年に東京大学出版会より『変容する死の文化-現代東アジアの葬送と墓制-』の書名で、刊行されている。

初年度の7月、旧知の鄭志明輔仁大学教授から本研究グループに対して、中華生死学会主催の国際シンポジウムを台湾において開催したい旨の誘いがあり、これを受けて平成24年2月、台湾において国際シンポジウムを一件と、研究会を二件開催した。シンポジウムに先立っては、台北周辺の葬送施設・墓地・納骨堂・葬儀関係教育機関などへの巡検が執り行われた。シンポジウムに際しては、巡検の際に見聞した事例もシンポジウム発表や討議内容の中に織り交ぜながら執り行われ、台湾の研究者との間で非常に中身の濃い意見交換や交流を行うことができた。この経験によって、われわれの研究成果を東アジア葬送墓制の中に相対化して位置づけた研究が推進されることとなった。

(2) 共同調査として企画した墓地調査は、千葉県松戸市の自性院墓地、同市川市の妙好寺墓地および大阪南墓園の悉皆調査が毎年継続して実施された。特に前者に対する調査でとられた調査方法、分析方法については、谷川章雄と朽木量が中心となって「シリーズ墓標研究入門」という作品を作成し、『墓石から歴史を読む』と『実践・墓石解読法』の二枚のDVDを千葉商科大学ICCネットワーク放送プロジェクトから刊行した。また大阪南墓園の墓石調査からも、近世以来の造墓活動の流れを明らかにすることができた。

(3) 最終年度の平成 28 年の 2 月 20、21 日に、本科研の総決算とも言うべき公開シンポジウム「イエ亡き時代の死者のゆくえ」を東京都青山葬儀所において開催した。発表は「死者を忘れない-“死者の記憶”保持のメカニズム-」(鈴木岩弓)「発掘された江戸・東京の墓-家と個人をめぐって-」(谷川章雄)「屋敷墓から見た近世・近代」(朽木量)「納骨堂の成立と展開」(山田慎也)「〈家〉なき時代の葬送と法」(森謙二)「誰が死者を弔い、お墓を守るのか」(小谷みどり)「個人化・無縁化社会を超える葬送墓制」(榎村久子)「葬儀研究からみる弔いの意味づけの変遷」(村上興匡)で、日本宗教連盟元事務局長の戸松義晴氏がコメントをつけた後、会場からの質問も含めたところで質疑応答がなされ、議論の深化が図られた。このときの議論の中心は、死者を取り巻く社会変化に基づき、イエの代替となる方法の模索におかれ、その成果は、平成 28 年度中に吉川弘文館から公刊される予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 28 件)

鈴木 岩弓、東北大学における臨床宗教師構想-東日本大震災から超高齢多死社会へ-、龍谷大学大学院実践真宗学研究科紀要、査読無、第 4 号、2016、41-70

鈴木 岩弓、現代日本人の死者観念-東日本大震災時の土葬採用をめぐって-、浅草寺、査読無、628 巻、2015、31-34

山田 慎也、『明誉真月大姉葬儀写真帖』からみた近代の葬列の肥大化、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、第 199 集、2015、115-142

土居 浩、葬送・墓制(日本民俗学の研究動向 2009-2011)、日本民俗学、査読有、277、2014、33-42

小谷 みどり、葬送の変容と社会背景、都市公園、査読有、207 巻、2014、2-5

鈴木 岩弓、いま宗教者に求められていることは何か、寺門興隆、査読無、175 巻、2013、58-65

土居 浩、異常死者葬法の習俗をめぐって、慰霊の系譜、査読無、2013、127-158

[学会発表](計 49 件)

鈴木 岩弓、死者と生者の接点、東日本大震災 5 年緊急シンポジウム「霊性を読み解く-タクシーの幽霊現象の反響と課題」、2016.2.24、東北学院大学(宮城県仙台市)

鈴木 岩弓、葬送墓制から見た現代日本人の死生観、第 22 回北陸宗教文化学会、2015.10.17、金沢大学(石川県金沢市)

土居 浩、埋葬をめぐる論争-近代日本におけるいくつかの事例から-、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015.9.6、創価大学(東京都八王子市)

鈴木 岩弓、被災地における「死者の記憶」、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015.9.5、創価大学(東京都八王子市)

SUZUKI, Iwayumi、Power of the Folk Entertainment against the Revival from the Great East Japan Earthquake、Asosiasi Studi Jepang di Indonesia International Symposium、2014.11.28、Mataram(Indonesia)

鈴木 岩弓、震災被災地にみる死者と生者の接点、第 38 回日本口承文芸学、2014.6.7、

東北大学(宮城県仙台市)

土居 浩、近代火葬論再考、日本宗教学会第 73 回学術大会、2014.9.13、同志社大学(京都府京都市)

鈴木 岩弓、従墳墓看現代、2013 台湾與日本生命文化事業国際学術論壇、2013.2.25、新北市(中華民国)

鈴木 岩弓、東日本大震災における「絆」復興にみる宗教の“ちから”、日本宗教学会第 71 回学術大会、2012.9.7、皇學館大学(三重県伊勢市)

SUZUKI, Iwayumi、Perception of the Dead in Contemporary Japan : Observation through the Great East-Japan Earthquake、DDU (Death Down Under 2012)、2012.6.29、Dunedin(New Zealand)

鈴木 岩弓、震災以降の宗教者のちから-「心の相談室」から生まれた「実践宗教学寄附講座」-、宗教倫理学会第 4 回、2012.6.15、キャンパスプラザ京都(京都府京都市)

[図書](計 6 件)

小谷 みどり、岩波書店、誰が墓を守るのか、2015、72

小谷 みどり、小学館、ひとり終活 不安が消える万全の備え、2015、189

山田 慎也・鈴木 岩弓、東京大学出版会、変容する死の文化-現代東アジアの葬送と墓制-、2014、230

森 謙二、吉川弘文館、墓と葬送のゆくえ、2014、214

檀村 久子、晃洋書房、お墓の社会学-社会が変わるとお墓も変わる-、2013、228

村上 興匡・西村明、森話社、慰霊の系譜-死者を記憶する共同体、2013、282

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

朽木 量・谷川 章雄、実践墓石解読法(シリーズ墓標研究入門2)2014、DVD1枚(55分作品)

朽木 量・谷川 章雄、千葉商科大学 ICC ネットワーク放送プロジェクト、墓石から歴史を読む(シリーズ墓標研究入門1)2013、DVD1枚(46分作品)

村上 興匡、震災『中外日報』記事データベース、2013、大正大学

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

鈴木 岩弓 (SUZUKI, Iwayumi)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50154521

### (2)研究分担者

森 謙二 (MORI, Kenji)  
茨城キリスト教大学・文学部・教授  
研究者番号：90113282

谷川 章雄 (TANIGAWA, Akio)  
早稲田大学・人間科学学術院・教授  
研究者番号：40163620

村上 興匡 (MURAKAMI, Koukyou)  
大正大学。文学部・教授  
研究者番号：40292742

山田 慎也 (YAMADA, Shin'ya)  
国立歴史民俗博物館・民俗研究部・准教授  
研究者番号：90311133

小谷 みどり (KOTANI, Midori)  
第一生命経済研究所・ライフデザイン研究  
本部・主席研究員  
研究者番号：50633294

朽木 量 (KUTUKI, Ryou)  
千葉商科大学・政策情報学部・教授  
研究者番号：10383374

土居 浩 (DOI, Hiroshi)  
ものづくり大学・技術工芸学部・准教授  
研究者番号：20337687

### (3)連携研究者

槇村 久子 (MAKIMURA, Hisako)  
京都女子大学・現代社会学部・名誉教授  
研究者番号：30259551

滝澤克彦 (TAKIZAWA Katuhiko)  
長崎大学・多文化社会学部・准教授  
研究者番号：80516691